

# 龍南會雜誌第百二十一號附録

## 參部江龍俱樂部遠漕記

十二月廿三日(第一日)稍曇

起床四時半、朝餉もそこ／＼に用意の荷物手に手に持つて遠航隊員十三人勇んで寮を出たのは五時少し過ぎる頃空には星が三つ四つ見えるのみだ。前途のあらゆる愉快やら困難やらを語り合ひつゝ艇庫へ着いた。我等がこゝ十數日間の運命を托す可き霧島號と第一號艇は直ちに艤装を了へて發艇したのは東天漸く明けんとする頃湖面は寂として恰かも夢のやう。

クラツチの音勇まゝ湖上の寂寞を破つて高くかの画趣に富んだ江津橋は靄より靄にかゝれる天の浮橋。降近の村には漢湖の中に朝の一夢を樂しんで居る様だ。やがて夜は靜かに明けはなれたれど空は寒曇りて日を見ることは出来ぬ。

中の瀬川尻もいつか過ぎ川は緑川と合する邊は可なりの波がある。何よりも先づ晝食す可く堤防の石垣に艇を寄せて暫らく休息した。靄は降るし中々寒いので先づ一人が竹の皮を募集し焚火に暖まつて大得意遠航筆頭の滑稽であつた。

それから兩艇は相前後して出發二町より少し上手に當る處からは海も近し艇の動搖も随分烈しかつた。時年の遠航で名を一時に轟かした某の得意の音頭は此の場合頗る有効であつた。

先づ二町で暫時海の模様を見るため艇を漕ぎ寄せて暫らく休むと寒氣が身に浸んで来る。

波も少しは静まつた兩艇は舳を並べて突進したが川口に来て見ると思ふたよりも波は高い。天は又相變らす怒の色を現はして居る。風は波を驅り波は激して我が艇を襲うて来る兩艇とは大分隔たつた。新艇は稍や左斜の方向をとつて南岸に近く進んだのである。舊艇の方を見るともう已に大分沖の方に進んで波と闘つて居る少々持てあまして居ると云ふ氣味だ。新艇の方は幾分デッキートだ、江津でさへ随分ロールするのに、今は海上の怒濤と來て居るから縦横に翻弄せられ一向進まぬ。一機を失すれば殆んど轉覆せんす勢の横波を受けやうものから逆も一とたまりもたまらぬ。力漕に強漕を繼いで頗ぶる努むれども艇の進行は殆んどなきが如くである。時々はオール引く手が自然と止む。艇長の口から洩れ來る「しつかり」の聲を得ては漕ぎに漕いだ。大分大きな波が來て時に艇を持ちあげて谷底に墜落せしめんとする刹那又次の波がやつて來て舳をかむ。此の激動と同時に餘勢で舳からは鹽水が流れ込む。艇中一人も聲を發するものがない。舊艇もまだ風流島を越して居ぬ。舊艇の方からは新艇を心配し新艇は亦少なからず舊艇を氣遣うた。已にして舊艇の方は早や住吉の方に向うたが殘念なことには少く廻轉が早やすぎて失敗に歸した。

新艇の方では夫れに鑑みてはごしく沖合に進んで行つた。愈々今は高浪を利用して巧みに廻轉せねばならぬ。失敗すれば水底の藻屑だ。顧みれば岸は遙かに遠ざかつて居る。

天祐なる哉難かく艇は住吉に向うた、波は舳を打つて艇の進行を助けるのである。舊艇も續いて來た。

上陸して風流館にとまることにあつた。荷物を持つて上陸する様は宛然漂着の蠻人其のまゝである。人も知る如く小さな風呂も砂をかむ蛤汁も我々の疲勞を慰むるには充分である。かくして一日を過ごした。

### 二十四日(第二日)晴

三時半起床出發は風の爲め思ひ止まることになつたが、午近き頃とあると定めなき冬の空の雲は開け風も止んで願つたり叶つたりの好天氣。身仕度勿々オールと兵糧とを運んだ。

時恰かも干潮の極点で僅か十四五間も行くに全く泥となつて最早漕いでも少くも効力がある。皆立ち上つて突いて見た。是も四五間進んだのみであつた。それも其の筈、泥の深さは二尺餘もあるのだ。突然某子は裾高に尻をからげ泥の中に立つた續いて又二三人猛然と跳り込むはよかつたが皆情ない顔をしてすぐ船にかけ上つたのは滑稽の極であつた。

今度は新艇の連中が皆泥の中に這入つた。腿から下は丸で切れて行くかと思はれる位。が併し勇氣を十倍して踏ん張ると足も其の中にアンバスして來て何の感覺もせぬ様になる。貝殻をぎで、足を切つても痛さは感せぬ。押しても駄目だ、仕方なく徐ろに潮の來るのを待つ事にした。恰かも此の時、數町の沖の方に一部の艇と思はれるのが丁度淺瀬に膠着して大分苦心の様子、

しばらくして漸やく潮がさして來たので直ちに三角に向け直航、海上頗ぶる隱やかである、三角に着したのは四時すぎ、こゝで神谷君が思ひかけなく上陸されることになつた、一人滅ればそれだけの寂寞を感じる譯だ、こゝでは皆一寸上陸したばかりで直ぐに航海を續けた、際崎の黒い燈臺の下

を過ぎ峽を出づれば、八代灣の島々はあちこちに見ねをめる。遙かに南の方、朦朧と山土に見ねる小森が日奈久の山だと聞いた時は何となく嬉しかつた。夕日は漸やく天草島の一角に沈みかゝつて居る、新艇が築島遙に半途といふ頃突然トツアのクラツチが折れたので困難は一方あらぬ。八代灣に入つてからは大分風が出て居たので中に波もある、艇が海水から見舞はれた事も數次である。やがて日奈久の燈火が見ね出した時のうれしさ、大分方も増してきた。千歳屋の二階が見ねる頃舊艇の方も無事入港した。夜は大に騒いだ。

十二月廿五日(第三日)晴

檐の音に目が覺める。日はもう大分高く昇つて居るらしい。海の方を見ると、天草島の翠姿が目につく、それに續いて紫海も舊に依つて奇麗だ。真帆や片帆があちこちらに散見して居る。此のすべての色象を旭光が色あげをして居る様子は何ともいへぬ景色である。其の暖かき懐に優游を恣にさせて呉れるかと思ふと、更に一層いひがたき慰樂が湧いて來る、カルタトランプ國旗合せ家族合せなどで午前の閑を消した、午後は舊艇で以て散漕を試みた夜は茶話會を開いた、内野、桂、井手、近森の諸君が來訪された。

二十六日(第四日)曇

朝の景色にそよのかされて散漕を樂んだ。内野君連中と金子君とは鹿兒島に向つて出發したので少なからずさびしさを感じた。午前姫の浦へと出かけたが、風があらいので遺憾ながら中止した、近森君も去つたので愈々さびしくなつた。夜に騒ぐのは例の如く矣。

## 二十七日(第五日)晴

朝食後直ちに姫の浦に出航した。方向を違へて永目とかいふ村に着いた。十數の島民が波止にたかつて、珍しさうに迎へたのは宛然里船到着と云ふ見ゆであつた、上陸してから休まれさうお家を探し廻つて、漸く一軒を得てこゝで晝食する事にした。其の古びた爐を圍んで、四方山の雑談に花を咲かし、小憩の後、歸途に就いたが序に大築島に廻つた。大理石島が出来て居て遠方から見ると、水晶珠を瑠璃盤に置いた様であるが、近寄つて見ると奇石怪巖が崢嶸として居る。伊豆の大門の如きものもあつた。一時間ばかり遊んで、こゝを去つた。今日の散漕は相應あるアルバイトであつた。

## 二十八日(第六日)雨後曇

朝大雨がふつたので、遊ぶ事も出来まい、栗林井上兩君去つて寂しくなつた。

## 二十九日(第七日)晴

今日は亦安息日である。午前は遊戯に暮らし、午後は温泉神社に詣で、社畔の峠に登つた。こゝは日奈久にとつて自然の燈台になつて居る。松林がこんもりと、寒風をはゞんでゐる。峠の堀切を向ふに越して見ると、一と谷を隔てゝ彼方はずつと山續き、雪は眞白を綿帽子を覆うて居る様。海になれた目には寔に絶景であつた。夜は歌留多會をやる。

## 三十日(第八日)快晴

田の浦に向つて十一時から出航した。赤松太郎までは三里だといふ。海水深く入つて好箇の港灣を

あして居る。薩肥街道の通ずる所である。夜は陰曆十五夜の明月にうかれて赤壁の遊びを真似た。

三十一日(第九日)快晴

十一時頃出帆八代沖に向つた。舊艇はコンスタントに行つたから大分先になつた。新艇は後れて走つた。天氣は極上で、恰も海村の梅花もやゝ咲きそめて居る。八代沖にかゝる頃は干潮であつたので沖合で艇は膠着した。で艇は其儘にしてシャコ堀りや貝拾ひで暮した。八代町を訪づれる筈であつたが、中止にしたのだ、太陽はやがて西に辭し去つた。西の空の色形容も出来ぬ美しい雲が舞ふて居る。夕靄は海の回をこめて居る。艇に歸つた頃潮は段々にやつて艇の膠着して居た處に高まると思うと、今までの洲は見る間に茫漠たる沖合となつて、艇はやがて浮きあがつた、先方にある舊艇を待つ間に東の山の端から赤銅色あかがねの大盆大の月が上り始めた。やがて全形が現れた時、嗚呼何等の絶趣ぞ。夕陽もなほ名残の色を留めて居る。この月の映する海面は鏡のやうに静かで、水中には火柱の大なる一本が引かれて居る。さても此んな絶景は船の人であければ到底見られないものと思つた。

四十年一月二日(第十日)晴

起き出た時は、太陽は日奈久の翠巒から離るゝこと數寸の頃であつた。先づ屠蘇も形だけを濟ました。赤松太郎山行きの計畫は空模様が悪るかつたので中止とした、皆んまで兒島教授を旅館柳屋に訪うて、それから例の温泉神社に登つた。こゝは又好箇の觀望臺である雪がちら／＼と降つて來た。

二日(第十一日)晴

非常に寒い。風もあつたので、終日無邪氣に騒ぎ暮した。栗林君神谷君が來たので又々大に賑やかに  
なつた。

三日(第十二日)曇後霧

朝十時頃、風波を犯して二艇共に御所の浦に出かけた。風波があまり激しくなつたので、一艇は  
引き返すことにあり新艇の方だけ浪間を進航した。漁夫に今日の天候を問うて見ると西北の方を指  
して「風だ風だ」と我等を警戒した。なる程其の方面に當つてあやしの雲がたふんで居る。浪も随分  
荒かつたが、次第にないで雲も散じ平穩に、黒島赤島に着いた。海峽に入ると、山翠海碧相映して  
何ともいへぬに、しかも澄み切つて、千尋の底まで透き通つて居る。槌の島に一寸上陸した。出發  
するとき島の小供等多數集まつて旗をふつてきりきりま萬歳を叫んで呉れた。今日は祭日だから、家  
々に、旭日旗が翻つてゐる所は實に繪に似て居る。此の邊は大小の島が澤山あつて其の少し入り込  
んで、灣をなして居る所には必ず二三十戸の村をなして居る。或る島影に漕ぎつけて、晝食を了へ  
たのは二時である。御所の浦はまだ遠いのでかへることにした。幸い南風はで、日奈久の方に行くに  
は追手である、オールを兩舷に直角にあげて居ると、風のために艇の進行は實に速い。果ては赤旗、  
外套で、立派な帆が速成された。只歌つて居さへすれば、獨り手に日奈久に着くのだ、こんな愉快  
な氣樂なことはない。柴島は忽ちにして來た。此は葦北と天草との間に在る小島である。松を冠し  
奇岩怪石で飾つて居る。島蔭に艇を着け、岩の上に匍ひ上がつて見ると、松は不斷の樂を奏し、  
浪は岩に碎けて時ならぬ花を咲かせて居る。鳩山の下に來ると、もう夕靄が夢の如く日奈久を罩め

て居る、留守中二部遠航隊諸君の來訪せられたさうな。

#### 四日(第十三日)曇

明日此處を立つのかと思ふと、戀々の情も起る。夜にあつて金子吾と井上君とが來て、最後の大茶話會を開いた。

#### 第五日(十四日)快晴

愈々出發の日となつた。朝早くより荷物の準備をなし、十余日の間吾々に多大の慰安と快樂とを與へて呉れた日奈久に訣辭を述べて、出航したのが午前九時半頃。うららかな天氣で海上も極く平穩であつたので、船足も早く、間もなく三角に着いた、午食するべく上陸して、小憩の後出發した。水道を通りぬけた頃から、追手に帆を擧げて走つた。網田沖に差しかゝる時分から、素的な潮流に出遇つた、船足は頗ぶる緩い。浪も頗ぶる高い。しかも温泉岳の方に、怪しい雲が起つて、日は將さに沒せんとして居る。寒風は膚を裂く様で、一通りの心配ではなかつた。やつこの事で住吉沖に着いたのは、暮色蒼然といふ頃だ。ところが生憎にも、恰度此のときは干潮で、進航に差支へるのみならず、夕靄が深いので、今夜の宿泊すべき二丁は、何處とも見ねあい、最早艇は膠着して仕舞つて、如何ともしやうがない。遂に二三人は艇外に下りて瀬踏をあして進んだ。が後では水路がなくなつた。幸い近邊に碇泊して居る帆船に二丁はと聞くと、遙かにきらめいて居る燈火の二三点ある處をいふ。愚圖々々して居ては逆も行かれないと皆勇氣を鼓して、泥中に飛び入り、エイヤエイヤと押した。半途位やつと來たかと思ふ頃、幸にも潮が満ちて來たので譯もあく二丁に着くことが



出來た。先登陸員を出して宿を求め例によつて手に手に荷物の輸送を開始した。オトルを持つもの、油紙包を持つもの、鞆をもつもの、宛然即成の假装行列だ。夕食を濟まうたのが十時半頃、腹が悲觀したのも無理はない。夜中八木君は郷里にかへつた。

六日(最終日)晴

二丁を出たのは、十時過ぐる頃、満潮に乗じて昇らうとの考へで、出發を遅くしたのである。前夜苦しい目に遇つた處も、今日は直ぐと別れるのが辛かつた。例の大曲も程なく過ぎ川尻を経て、中の瀬に着あいたのは、最早太陽を西に斜に見る頃でつた。吾人は愈々樂しかり又辛かりし遠航を茲に了へて、なつかしき書湖に着いたのである。艇庫に着いたのは午後四時半。

遠航員は

平井文雄	志摩次郎	三隅庠	星三藏
八木繁	金子五策	栗林景英	井上重喜
高橋鐵之助	森本敬一	田村益雄	高田隣徳
神谷甫彦			